【当たり前じゃない】

千葉県　翔凜中学校　二年　　岡田悠李

「いちごはね、水がすごく大切なんだよ。」いちご農園を開いている伯母が言った。伯母は、メキシコなどの国に青年海外協力隊として活動しに行っていたことがある。分野は農林水産だ。そこで見た景色は日本と違って緑が少なく辺りがカラカラだった。しかし、現地に住んでいる人たちは食べ物を栽培していたという。水が少なければ少ないなりの工夫をして子供や大人関係なく働いていた。その中に加わり活動していた伯母は、農業の楽しさや食べ物の大切さを知りいちご農園を開いたと言っていた。そんなドラマみたいな話を聞いて私は、世界の水事情について興味を持った。

メキシコは「水道水が飲めない」この事はメキシコだけに限らず大半の国はそうだ。まず、この事にすごく驚いたと同時にそのことを知らなかった自分がとても恥ずかしかった、悔しかった。蛇口を捻っただけで水が飲める、そんなことが当たり前だと思っていた。喉が渇いたら水を飲み、渇いていなくても熱中症になってしまうからという理由で水を飲んでいた。お風呂に入っているときも水を出しっぱなしにし、少し洋服が汚れた、少し臭うからって、すぐ洗濯物にだしていた。「こんなのは当たり前じゃない。」生活していく中でだんだんそう感じてくるようになった。

学校でSDGsを学習した。その中に水に関する課題もあった。それは、六番目の「安全な水とトイレ」だ。トイレ？なんでトイレなのと疑問に思った自分がいた。今まで水に関することを調べてきて、今の生活は当たり前じゃないと知っていたのにもかかわらず、さすがにトイレはどこの国にもあるだろうと勝手に思い込んでいた。しかし、現実は違っていた。トイレをするのは川、その川を使って洗濯物も洗う。それだけでなく、その水を飲み水にもしているそうだ。衛生面的にも悪く、毎年たくさんの幼い子供が命を落としている。その事実にすごく心が痛かった。

これらのことを知り、日本は本当に裕福で生活しやすい国だなと感じた。しかし、裕福なのにもかかわらず食料は輸入品ばかり。裕福なゆえに食料を大切にしない。年間の食料ロスは五百二十二万トン、これは世界で飢餓に苦しんでいる人たちに支援する食料の約一・五倍だ。水が少ない中工夫して、少しでも多くの食料が生産できるように苦労をしている人たちがいる。そんな人に私たちは頼り、ご飯を食べている。私たち日本人は、生活に苦しんでいる国と深い関わりがある。

ニュース番組で手足が細い幼い子供が、頑張って川から水を運んでいる動画が流れた。「日本は発展途上国にどんな支援をしているのだろう？」と気になった。調べると、日本はアジア、中東、アフリカなどの水不足で困っている地域に貢献活動をしていた。日本の水道技術を伝え、水道や浄水場などの施設を作っている。この文章と共に子供たちが笑顔の写真が載っていた。すごく嬉しかった。日本が一人でも多くの人の笑顔を作るために動いている。水に関わる環境問題が少しずつ解決してきている。世界中の子供たちが働かなくても生活できる日が一日でも早く来てほしいと願っている。

身の回りに水があることは、決して当たり前ではない。簡単にお風呂に入ることや、水も飲むことができない国だってある。そんな国を私たちのように身の回りに水がある国にしていくことが大切だと思う。その第一歩として「一人一人の水の使用時間を五分減らす」これはすごく大事なことだ。水は無限に出てくるわけではない、必ず限界がきてしまう。未来の日本のためにも世界のためにもこのことは大切だ。水があることは「当たり前ではない」このことを胸に刻み水を大切にしていきたい。